

Title	ある晴れた6月東京・白金で行われた哲学カフェの報告
Author(s)	寺田, 俊郎
Citation	臨床哲学のメチエ. 2003, 12, p. 4-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/3827
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ある晴れた6月の夕方

東京・白金で開かれた哲学カフェの報告

寺田俊郎

一年ぶりに白金キャンパスで哲学カフェを開いた。今年のテーマは「ワールドカップの熱狂」。終わってみんなでビールを飲んだプラチナ通りの「ラ・ボエム」では、大型スクリーンにイングランドの試合が映し出されていた。それから一年 今回のテーマは「ケア」である。

「ケア」をテーマとしたのは、昨年に引き続き社会福祉学科の学生団体「ぷらちな苦楽部」の皆さんと臨床哲学の同僚で看護師の西川さんが参加してくれることになっていたことが主な理由である。実は私は「ケア」というテーマはあまり得意ではない。このことは、後で述べるように、今回のカフェのファシリテーションに影を落とすことになるのだが、しかし、「ケア」をテーマとして意義深い対話ができそうだという期待もあり、また、私自身も「ケア」について考えてみたいとかねてから思っていた。「ケア」は、臨床哲学の学生だったころ繰り返し議論になったテーマであり、高校の教員をしていたころ「心のケア」というフレーズが流行しはじめ、日々高校生を前にしていると「心のケア」が切実なものに感じられることがたしかにある一方、「心のケア」がどこことなく胡散臭いものにも感じられるという経験をした。今も「心のケア」というフレーズをよく目にするが、「心のケア」を掲げて何かをすることにはやはり違和感がある。

今回の参加者の多くは、私や西川さんが直接声をかけた人々だったが、学内の掲示を見て来た人々が思ったよりたくさんいた。なかでも嬉しかったのは、二年前私のソクラティック・ダイアログの授業に出ていた学生が二人、掲示を見て来てくれたこ

とだ。もっとも、そのうち一人は、カフェだから出入り自由だろうと途中でのぞいてみたものの、入りそびれて帰ってしまったと後で聞いた。また、掲示を見て臨床哲学に関係があるのかもしれないと思って来てみたら本当にそうだった、という嗅覚の鋭い人もいて驚いた。

さて、漠然と「ケア」をテーマとしたのでは話しくいだろうと思ひ、さらにテーマを絞ることにした。時間が十分あれば、その場で参加者の提案にもとづいて絞り込むこともできるし、その方が好ましいのだが、今回は時間が限られていたので、鷲田さんの著書の一節を「刺激」として用いることにした。「傷つけるケア」の一節である。私は、書かれたものよりも一人一人の具体的な経験を「刺激」とする方が好きだが、書かれたものを刺激とするのも悪くはないと思う。

対話が始まるとケアというものにさまざまな角度から光りが当てられた。さまざまなものの見方が語られ、聞かれること、一つの事柄を語るさまざまな語り方に気づくこと、それは哲学カフェの魅力の一つである。だが、それだけなら特に「哲学」カフェである必要はない。具体的な経験からその背後にある問いを見つけ、問うことができなければおもしろくないと思う。今回のカフェではいくつかそういう問いに触れるこ

とができた。哲学的思考への入り口があちこちに見えた。たとえば「ケアがケアでありうるかどうかを受け手次第だとすると、ケアの主体はなくなるのではないか」という問いである。しかし、私はその問いを参加者とともによく掘り下げて、哲学的思考へと入っていくことができなかつた。今までのカフェのように、参加者の発言と発言の関連がよく見えず、私なりに議論の流れの流れにまかせたり変えたりすることがうまくできなかつた。どんな話の流れになるかはやってみないとわからないからやむをえない面もあるが、私自身が「ケア」というテーマがあまり得意でないことが響いていたことは否めない。前もって何冊かの本を読み直し、ケアについて考えをめぐらして臨みはしたのだが、十分ではなかつた。ファシリテータはその都度のテーマの専門家である必要はもちろくないが、ファシリテータがテーマにある程度親しんでおくことは、対話がおもしろいものになるために大切なことであると改めて思う。

また、途中で入りそびれた学生がいたことも、今回のカフェの一面をよく表している。カフェというより授業のような雰囲気になってしまったのである。教室を使ったこと、休憩やテーブルごとの対話の時間を設けなかつたこと、ファシリテータの私を介したコミュニケーションのパターンを変えることができなかつたことなど、いろいろな原因が考えられるが、いずれも工夫や配慮で対処できたはずのことだ。反省を今後にかしたい。

とはいえ、思ったよりも大勢の参加者を得て、好評のうちに終えることができた。午前中から授業や研究会で忙しかつたにもかかわらず、対話に参加してくれただけでなく、会場や飲み物の準備をしてくれた「ぷらちな苦楽部」の皆さん、遠くから応援に駆けつけてくれた西川さんをはじめ臨床

哲学の同僚たちに感謝する。西川さんが来られることははじめからわかっていたが、さらに3人の若い学生さんたちが取材も兼ねて来られると聞いて、実は、少し緊張した。

私が関東に移り住んでから開いたカフェはこれで3回目になる。今回ほどにぎやかではなかつたが、一昨年は横浜キャンパスで「なぜ環境を守らなければならないのか？」、そして昨年は最初に述べたように、白金キャンパスで「ワールドカップの熱狂」をテーマに対話した。この次は、秋に白金キャンパスの学生ラウンジでカフェを開こうと、例の途中で入りそびれて帰ってしまった学生と話している。また、今回知り合いになった看護関係の人々との繋がりもぜひ生かしたい。

終了後、一年前と同じプラチナ通りの「ラ・ボエム」で話に花が咲いた。このお洒落なイタリアン・カフェを会場にしてみるのも、悪くないかもしれない。

(てらだとしろう)

